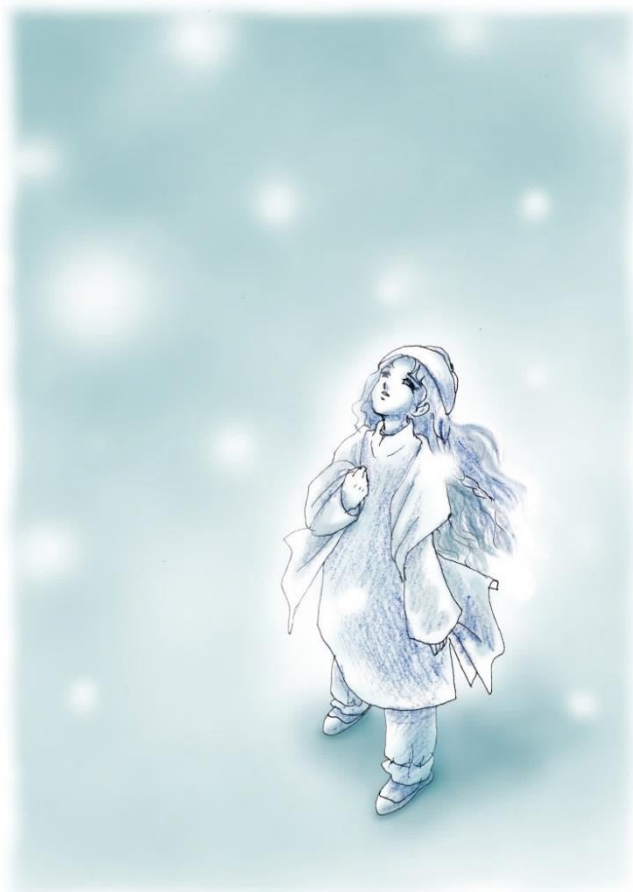


風の末裔シリーズ・2ndシーズンの7

～ 風花（かざはな）～



その日の湖はいつにも増して凪いでいた。冬が近いので主様も眠っている時間が長いんだろう。

湖の巫女は身震い一つして、朝霞の湖畔を見渡した。お堂の屋根に霜が降りている。

「冷える訳だわ…」

巫女の寝起きしている庵には小さな暖炉があるが、本格的な冬が来る前に冬囲いをきちんとしておかねばなるまい。

「薪も集めておこなくちや」

シャンシャンと鈴の音がして、蒼の里の方からカワセミの馬がやって来た。いつまでも色の濃くならない水色の長い髪に、同じく水色の真ん丸な瞳の蒼の妖精。

その彼が馬から飛び降り、後ろ手に何か持って「ニコニコ」と巫女に歩み寄って来た。

「これね、昨日、白い森で買ったの」

いきなり耳の上の髪に、何か差された。

「蒼の狼さんに！」

横目でそれが薄青色の花だと分かった。

「えっ?!!」

カワセミは嬉しそうに、巫女の出来映えを眺めながら後退り

した。

「うん、巫女の黒い髪にびったりだと思ったんだ！」

茫然とする少女にお構いなしに自分一人で満足し、妖精は踵を返して馬に飛び乗る。いつも連れて来る筈の巫女の馬が、今日はいない。

「あの、今日はお仕事は？」

「巫女は冬の準備に忙しいだろう。今日は簡単な任務だから一人で大丈夫なの。戻って来たら冬囲い手伝うね！」

子供みたいにぶんぶんと手を振りながら、カワセミは馬を上昇させて行った。

「じゃあねー！」

何て慌たらしいヒト…。

巫女は、髪の前差された花に手を添えながら、水色の髪をなびかせて飛び去る妖精を見送った。びっくりして何も言えなかった。戻って来たらお礼、言わなきゃ…。

湖の向こうの山に陽が傾きかけて、巫女は芝を束ねる手を休めた。…遅くなったので里へ直に帰ったのかもしれない。

「お礼、言いたかったな…」

でも明日になったらまた逢えるだろう。頂いた花は、小さな

カップに生けてある。主様が、シラネアオイと言つ名を教えてくれた。

巫女はその時、蒼の里で騒ぎになっていたのを知らない。

陽が沈みきり、星々が空を覆つ頃、ツバクロとノスリが、巫女の馬を伴つて空に現れた。巫女は庵に居たが、気配に気付いてすぐ外に出た。

「カタカゴ…」

「巫女殿…」

二人、表情が硬い。巫女は心臓がドクリと波打った。

「カワセミ、今日、来た？」

「はい…朝方」

「任務へは一人で？」

「はい、今日は簡単な仕事だから一人で大丈夫って…、あの…」

巫女の声が段々に動揺を帯びる。

「あの…!!」

二人、ただならぬ気配を巫女に伝えぬよう、配慮しているのが分かる。

「いや、いいんだ、心配しなくていい」

しかし二人は、慌ただしく自配せしめる。

「教えて下さい!! カワセミ殿は…里に戻っていないのですか? 今日は何処へ行く予定だったんです?!!」

「いや、巫女殿は……」

「私は蚊帳の外なんですか?! 心配しちゃいけないんですか?! 自分でもこんな大きな声が出せるのかと、びっくりした。

二人も驚いて顔を見合わせ、頷うなすき合った。

「カワセミの今日の任務は一人じゃ不安だから、必ずカタカゴを連れて行くようにって、長様が念を押ししていたんだ」

「えっ!!」

「で、奴の帰りが遅かったから探しに出たら、里と湖の森に、巫女殿の馬が隠されるように繋がれていた」

「それって…」

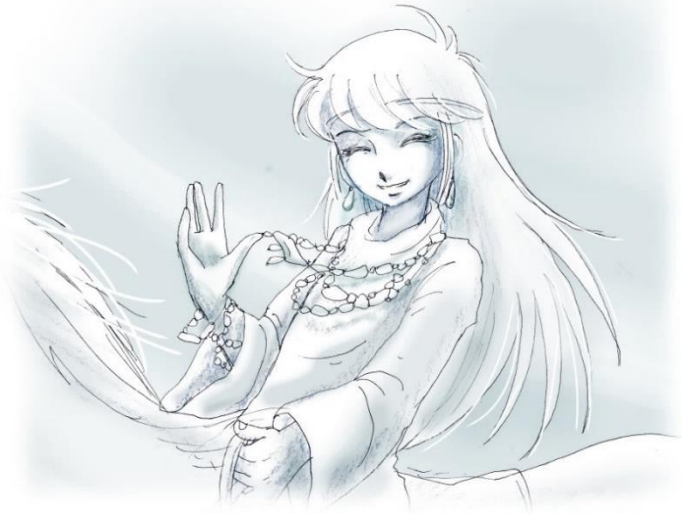
カタカゴの顔色が変わる。

あの、長ベツタリなヒトが、長の言う事を反故にするなんて『普通』じゃない。今日の任務に無意識に危険を予知していたって事なんだ。だからこの二人も動揺しているのだ。

「だって…だって…今日は、簡単な仕事だって…」

胸がつかえて、喉から心臓が飛び出しそうだ。

「帰って来たら冬囲い手伝ってくれるって……私…お礼言っ  
な……い……」



ノスリが、ぐらぐら揺れる巫女の両肩を掴んで支えた。

「しっかり!! 俺らがこれから行くから!! 大丈夫だ!!」

しかし巫女は完全に動揺していた。

「ワタシ…、私も行きますっ! 連れて行って下さいっ!!」

いつもの聞き分けの良い大人しい少女とは別人だ。巫女が草の馬に駆け寄る前に、ツバクロは素早く巫女の馬の尻を叩いて空へ飛ばした。

「カタカゴ、僕達は君を仲間だと思ってるから話した。仲間なら冷静になってくれ。君は連れて行けない」

そう言って二人は素早く馬を上昇させた。

「待っていないさい、いいね!」

二騎は空の点となり、彗星のように尾を引いて西へ向けて飛び去った。

「待って!!」

初めて人間の身を悔やんだ。何て……ちっほけで情けない自分……。

\*\*\*

時は少し遡る。蒼の里のいつもの朝。

蒼の長の一番弟子の三人は、ひとつバオに同居している。

入り口の両側にツバクロとノスリのベッド。奥にカワセミのベ

ッ下。

定規で引いたように、全て直角にきちんと整頓されたツバクロのスペース。物が多いが、それぞれが機能的に稼働している。で、それなりに活気のあるノスリのスペース。奥のカワセミのゾーンは…カオスだ。スペースって言うより、『巢』…。

物持ちな訳でもない。ベッド周りは、まじないのヒトガタや、干した植物や、鳥の羽根の繋がったのや、規則正しく並べられた石や、何やらよく判らないモノ達に囲まれている。触ると怒られるので、二人は近寄れない。

カワセミに言わせると、一つ一つに意味があり、皆自分と自分の呪力を保つ為に必要不可欠らしい。そう言われてしまうと、手出しが出来ない。

しかし最近、増殖するそれらが二人の領地を侵食しつつあった。先日などは天蓋の蔭の中に住み着いた蜥蜴が、寝ているノスリの顔の上に落っこちて、情けない悲鳴を上げさせた。

相手がカワセミでなかったら、二人とも遠くおに激しく抗議していただろう。

「じゃあないよなあ……」

身体が成長するに連れて、弱い心臓や内臓がその身を支えられないんだらうか？ カワセミは、ますます頻繁に体調を崩す

ようになった。

それなのに、術の力だけとどんどん強くなる。今や長も頼もしく頼りにする魔力が、彼の命取りになる綱渡り状態だ。

それを一番怖がっているのは、当のカワセミに決まっている。その彼のすがり所になっている御守りの数々を何とかしろとは、二人とも言えなかった。

しかし、その朝はどういう風かが吹き回した。

朝、二人が起きると、いつもはギリギリまで寝ているカワセミが、早起きして何やらゴソゴソやっている。

彼の大切な御守りグッズを、大きな木箱に詰め込んでいるのだ。ベッド周りは既に『そんなにソコ広かったっけ？』状態にスッキリしている。

「ど、どうしたんだ?!」

ノスリがいつべんに目が覚めて飛び起きた。同じように飛び起きたツバクロと視線を交わす。お前、何か言ったのか？ いや……。

「ふう……」

全てのグッズを箱に詰め終えて、カワセミは掌をパンパンとはたいた。

「おい…どうするんだ、それ？ 模様替えか？」

「うん？ 捨てようと思ってる…、あ、どれか要る？」

「いや、それは遠慮しとくが…どうしたんだ？ 一体？」

水色の細っこい妖精は、まだ枯葉や木の実がくっ付いているベッドに腰掛けて、おっきい目をくりくりさせて考え込む。

「……………ん…えとね、…何でかな…？」

ああ…またいつもの奴だ。

こいつは理屈じゃなく、何かの流れを感じ取って、頭で考える前に行動に移す事がある。この場合、二人が困っていたのを悟ってくれたのだろうか？

「…ああ、そうだ！」

カワセミは何かに辿り着いた。

「ボク達、修練所を卒業して長の弟子になってから、ここで三人で暮らし始めたよね」

「あ…ああ…」

いきなり話が飛んだが、まあこれ位なら二人は慣れている。

「今まで一緒の太い道を歩いて来たけれど、段々別の枝道が増えて来る訳…、例えば」

カワセミはノスリを見た。

「キミは彼女が出来たら、あんな蜥蜴の住む部屋にオンナノコ

を呼べないだろう？」

「あ…ああ、まあな」

それは常々思っていた。しかし『カワセミと同居』ってだけで、遊びに来てくれる女の子なんていないのだが…。

「ツバクロだって、これから仕事の範囲が増えて、時間も不規則になる。抱え込む大切な者も増えて行く」

ツバクロはマジマジとカワセミを見つめた。予言…？ なのか…？

「と、いう訳で、ボクは将来的に他所で暮らす。此処を出て」

「あ…ああ…」

二人は拍子抜けして肩を下ろした。

そんな事は分かりきった事だ。いつまでも男三人で暮らしている訳には行かない。やがて所帯を持って家庭を作り、子供や親族に囲まれて暮らすのだろう…。と考えると、二人とも同時に気付いた。

そのどれもカワセミには当てはまらない。

この綱渡りで今日明日を生きている者は、そんな未来のビジョンは見えていない。自分の事だけで一杯一杯で、この上何かを抱え込むなんて、思いもしていないだろう。

そもそも早くに両親を亡くして親族もないカワセミには、

家族って概念は無いのだ。

何とも言えなくなってしまうた二人の心中を知ってか知らずか、カワセミは明るく続けた。

「ボクが将来的に住みたい場所、聞いといてくれるかい？」

「ああ…」

二人はカワセミを見つめる。

「あの夜、皆で行った馬具置き場のパオ！」

「えっ？」

「これから長にお願いするんだけどさ。ちょっとつつ片付けて住めるようにしようと思う」

「だ、だって彼処(あそこ)、…元、産屋じゃないか」  
ツバクロが眉根を寄せた。

人間ほど『不浄』という意識はないが、産屋というのは『男には割り込めない、何だか凄い事が起こる場所』という概念がある。要するに男って自分で把握出来ない物が怖いのだ。

「うん、そう。だからだよ」

「だからっ？」

男二人、寄り添うように目を見交わす。

「命の生み出される所。生命の力の集まる所。あの巫女や、ボク達だって、あすこからこの世に来たんだよ。凄い』はじまり

の力』があるんだ。こないだ入った時気付いたんだ。ここなら、御守りも要らない。ボクが居るのに最適な場所だって」

「あ…ああ…、そうなんだ…」

二人ともおぼろ気に理解した。

何にしてもカワセミが安心して暮らせるのなら、それに越した事はないだろう。

「よし、俺も馬具置き場の片付け、手伝ってやるぞ」

「ノスリィ…、やっぱキミって頼りになる！」

「まずは長に許可貰わなきゃ…だよ。馬具置き場を新たに新設しなきゃならなくなるから」

ツバクロも目が覚めて、具体案を喋り出した。

カワセミはいつもの石の鎖を手や首に巻き付け、立ち上がった。箱を引きずり出した。

「長は許可を出さざるを得ないよ。ボク、彼処(あそこ)でない」と、生きられないんだから」

「えっ？」

二人同時に顔を上げたが、カワセミは箱を引きずって入り口から出て行った所だった。

変な事を言った？ 聞き間違いか…？

いつもの口癖の『〇〇してくれないとシンじゃう〜』の延  
長だろっか？

二人はそう思う事にした。何にしても今日が始まる。まずは  
仕事だ。カワセミの引越は、仕事の後で少しづつ手伝って  
やればいいたろっ。

里の焼却場への道々。

蒼の里だってゴミは出る。もっとも物が満ち溢れている訳で  
もない。殆どの物はヒトからヒトへ受け継がれるが、たまにカ  
ワセミみたいに『人生の転機』に処分したい物が大量に出る場  
合がある。

大きな木箱を引きずって歩くカワセミに、後ろから忍び寄る  
影があった。

わっしっ!! いきなり頭を掴まれた。

「ふ、ふふふふふ——!! やった、ついに触ったわ!!」  
カワセミがめっくら振り向くと、勝ち誇ったお団子娘が仁王  
立ちしていた。

「ふ…ふわわわして可愛いじゃないー! …よし!! ついに言え  
たわ!!」

まだそんなの、狙っていたのか…。

当のカワセミは、ぼろっとした顔でフィィィを見つめている。

「ああ、そうっ? …どうも、ありがとう…」

フィィィが固まる番だ。

「ちょ、ちょっと…、何? その当たりの前な反応は? いつもみ  
たいに、やめーてー! 術が逃げる—!! とか言いなさいよ!!」  
そっちの方がいいのか? …いいんだろっな…。

「うん、今は術は逃げない。ボクが多分キミをちょっと好きに  
なっているからかな?」

フィィィは両肩をいからせて、蟹みたいに後退りした。そん  
なフィィィにお構いなしに、カワセミは箱の中から、木の枝を  
丸く曲げた白いリースを引っ張り出した。

「はい、これあげる」

「ふえ?」

鼻先に突き付けられたそれを寄り目で見て、お団子娘は更に  
固まった。

「白い森の冬の新芽で作った。幸せを呼び込む。ボクには要ら  
ないモノだけれど…、将来キミとノスリの住む家の入り口に掛  
けるといいよ」

言っただけ言っただけフィィィの首にそれを掛けると、カワセミは  
まだ箱を引きずって歩き出した。今、言われた言葉にパーワッ



て、完全に固まってしまったお囃子娘を残して。

長が執務室に入るのは、皆が集まる時間の少し前だ。今日の依頼の書類を確認して、仕事を割り振る為だ。

机に向かった所で御簾が開いて、水色の長い髪の妖精が入って来た。

「お早うございます、カワセミ。今日は早いですね」

長は机の書類から目を離さずに言った。

次の瞬間膝に温かみを感じた。カワセミが音も立てずに歩いて来てしゃがみ、椅子に座る長の膝に頭を乗せたのだ。

「どうしたんです？ 甘えんぼに逆戻りですか？」

カワセミが生まれた時代はまだ少し戦や争いが残っていて、里でも幾人かが命を落として孤児が生じた。

親のいない子供を一族は皆で育てる事となっていた。大概は何処かの家庭が引き取るのだが、カワセミは何でか『あぶれた』。何件かの家を転々としながら、ツバクロ達と一緒にギリで修練所をスキップ卒業したのだ。

弟子入りして…、生まれて初めて、自分を愛し大切に育んでくれる存在に出逢った。ノスリやツバクロが思う以上に、カワセミにとって、長は『絶対』なのだ。

「……………」

カワセミは何も言わず、子供の頃みたいに、仕事している長の膝に頭を埋もれさせた。長も昔みたいに、カワセミの頭を猫みたいに乘つけたまま、静かに仕事を続けた。

パオの屋根で小鳥の声がして穏やかな時間が流れ、長はふつと、あの小さなカワセミが膝から顔を上げて来そうな錯覚に襲われた。

今現在のカワセミが顔を上げ、外に二人の弟子の音がした。カワセミは何事もなかったかのように定位置の長椅子に歩き、どさりと背をもたせ掛けた。

二人が入室し、いつもの執務室の風景になる。

ツバクロとノスリは二つの仕事を二人一組で午前と午後で割り振られた。

「ボクはあ？」

「カワセミはこれです。…ただちょっと気になるんですよ」  
長は、報告書の書面を読み返して眉根を寄せる。

カワセミと他の二人も覗き込んだ。

《西の外れの山岳地帯と草原の間に来た、地面の亀裂についての報告書》

「地割れの箇所を調べて来るだけでいいんですが…。放って置いていいモノなら良いんですが、そうじゃないと感じたら、深入りしないで戻って、二人に報告して下さい」

長は、今日から東へ数日間の、急ぎの用事が入っている。

亀裂の調査自体は大した事ないのだが、カワセミの今朝の無意識であろう行動が、心に引っ掛かるのだ。

「今日は必ずカタカゴを伴って下さい。くれぐれも無理はしないように…」

「はあ…」

カワセミはいつもと変わらない感じで、軽く返事した。

ツバクロとノスリは後々思う。

この時、朝カワセミが身边を片付けていた事を話していたら、長は何かを察してくれて、何かが変わっただろうか？

それは誰にも分からない。

予知って、変えられるモノなのかどうかも分からないのだから。カワセミのように運命の中に粛々と歩を進める事しか、小さい存在には成す術がないのだろうか……？

\* \* \*

二人の青年はただ黙って、夜闇の中、黙々と馬を飛ばした。

悪い事はかりが頭を過る。カワセミが朝、妙に爽やかだった事…。長に念を押されたのに巫女を連れて行かなかった事…。悪い想像に繋がりがそうになるのを、頭を振って払う。

どうせ、すべていつもの気まぐれだ。またどこかで睡魔に襲われて、動けなくなっているだけだ。とっとと見つけてやるな。きや、風邪を曳かせてオタネ婆さんに説教喰らうのはこっちなんだから…。

下方の草原から翡翠色の光の合図が立ち上った。

ホッとしたのも束の間、地上で見上げるのは、黒鹿毛に跨がったキビタキだった。

久し振りだが、ゆっくり話している暇はない。二人は軽く会釈するだけで通り過ぎようとした。しかしキビタキは、彼らを引き留める言葉を叫んだ。

「ね、カワセミ、里に帰ってる？ もしかして帰っていないなんて搜索に行くんじゃないの?!」

「君、何か知っているのか?」

二人は降下して、弟子の両肩を掴んだ。

キビタキは…人間の皇子としての名前はトルイだが…、今日

も城で大人達に混じって政(まつりごと)の議の末席に居た。父王はとにかく現場から学べ！ の方針なのだ。

夕刻近く、いきなり窓が開いて、竜巻のような風が机の上の書や筆記用具を舞い上げた。不思議がる大人達の向こうに、バルコニーの縁に立つカワセミを見た。人間には妖精は見えない。「ごめん、風が俺に話があるって!!」

会議室を飛び出す赤毛の皇子に、臣下達は、変な所は父王に似て…と呆れ見送った。

バルコニー続きの城壁で、キビタキは久々の兄弟子に逢った。しかし挨拶抜きに、カワセミはいきなりキビタキの胸べらを引っ張った。

「いっぺんしか言わないから良く聞いてよ。王都と蒼の里の間のブナの山岳地帯…、南の山沿いに、人間の部落が幾つかあるよね。その住民は移動させて。なるべく南に。今晚中に」

「え…?! えっ?!」

「妖精は、人間にこんな風な親切はしない。でもキミだから言う。キミの治める土地になるんだろっつ」

その言葉の最後の頃には、カワセミはもう上空だった。

「どういう事?! カワセミ、カワセミ——!!」

「…ツバクロと…ノスリと………」

それだけ微かに聞こえ、水色の妖精は小さくなり見えなくなった。

「……………」

ツバクロとノスリが唾を呑み込むのを、少年皇子は、真剣な目で見ていた。

「狼は親父と国境へ行って不在だ。だから俺、黒鹿毛を走らせて来てみたんだ。でも住民を移動なんて…」

「……………」

二人の妖精は顔を強張らせて無言だ。キビタキは目を上げた。

「うん!! 俺…、行く」

「キビタキ…」

「カワセミがわざわざ言いに来てくれたんだ。信じる。どんな事してでも住民を移動させる。それが人間の俺の役割なら」

「キビタキ…」

「だからカワセミを頼む!! 絶対だよ!!」

キビタキは馬を返して少しの灯の見える夜の部落へ駆けて行った。

二人は更に緊張の顔を見合わせ、例の亀裂の場所へ急いだ。

小さな部落…山側の一番大きな建物…多分族長の住居なんだろうが…：そのてっぺんに風で駆け上がり、キビタキは大きく息を吸った。

皇子とはいえ、身分も証明されていないこんな片田舎で、子供の言う事など誰が聞いてくれよう。ましてや異形の自分だ。

「あんま、やりたかないけど…ここはそれを逆手に取って…」  
剣を抜き、高く掲げた。

「雷(いかづち)!!」

晴天の星空に雷鳴が走る。天より真っ直ぐに伸びた稲妻は、轟音と共に部落の真ん中の巨木に直撃した。家々の住民は、ビツクリたまげて老いも若きも飛び出した。

よし、注目度は十分だ。

「俺様は山の狼の化身…!! そう、赤い狼だ!! 今からこの村は俺様一族が頂く。逃げるなよ! どこまでも追いつけて、一人残らず噛み砕いてやる!!」

翡翠色のオーラに照らされた、燃えるような赤毛の銀の眼の怪物に、住民達は震え上がった。

逃げるなよ、と言われれば逃げるのは人の性。馬や馬車に分散し、一目散に山と反対方向…南に逃げ去った。

「ふう………」

後、村の数だけこれをやるのか…：すごい自己嫌悪に陥りそう…。

つつーか、これで何でもなかったら、明日、蒼の狼に何て言い訳すりゃいいんだ? 往復ビンタ位じゃ済まないだろうな…。

それでも彼を突き動かす水色の兄弟子の顔を思い浮かべて、次の部落へ馬を向けた。

\* \* \*

キビタキが派手に雷を呼んでいる村より少し山側…、山脈の裾に、前日に現れたオレンシの細長い亀裂があった。ヒトの目には見えない。『見えざる世界』の現象。

はっくり開いた裂け目の中には、色んな力の流れが、ヒトには知り得ぬ法則で渦巻いて、落ちたり昇ったりしている。

元々整然と流れていたのが、何かが滞って歪みとなり亀裂が開いた。

オレンシの線の端で、瘦せた草の馬がじっと四肢を踏ん張っている。それ以上裂け目が広がらないように地面を押さえるみたいに。きっとそれが馬(かれ)に出来る精一杯なんだ。

馬の主は、亀裂の中に居た。淵から少し入った所に、今にもすり落ちそうな流れがある。そこが落ちたら一気に亀裂が広がってしまふ…、そんな場所をひたすら支える独りの影。

片膝付いて、緑の槍を作り出してつかえている両手は、痺れて感覚が無くなっている。もっどんだけ、この姿勢でいるんだろ…？

亀裂を見付けて、中を調査し、危ういモノを感じた。

とにかく、イの一番に、この辺りに住まう人外達を逃がした。それからキヒタキに忠告に行った。人間の事は彼次第だが、キヒタキなら大丈夫だろう。

里にダッシュで戻って応援を頼むつもりだった。

しかし、再度この上空に来ると、流れが今まさに崩壊して滑り落ちる所だった。間一髪受け止めたのだ。

「ボクって要領悪いよね…」

何で巫女を連れて来なかったのかな？ いや、彼女は意外と子供だ。自分を助ける為なら、身に過ぎた危ない事を平気でやっちゃう。やっぱり朝の勘通り、連れて来なかったのが正解だ。

あとは……

不意に楽になった。自分に掛かっていた力が失せたのだ。カワセミはふうっと前に崩れた。四つ這いになって振り向くと、待っていた二人が、両側で歪みを支えていた。

「…遅いよ………」

「待たせた！ 大丈夫か？ カワセミ」

風力で歪みを支えながら、濃い縁取りの眼の青年が言う。

「まあ……ダイジョブ…、長には？」

「出掛けに鷹を飛ばした。もう着いている筈だ」

「おい、これ、どうすりゃいいんだ？ ずっと支えている訳にはイカンだろ」

大地の力で歪みを支えるがっしりした相棒は、顔を真っ赤にしてブルブル震えている。

カワセミは立ち上がり、下を向いてあちこち調べながら、説明を始めた。

「それ、離すと、将棋倒しみたいに段々と大きい歪みに繋がって、大災害をもたらす…草原全体にね。具体的に言うところ…」

カワセミはさらさらと言うが、二人は自分達が支えているものに、顔色が変わる。

「えっと、あれは、水…？ そう、地下水の流れが変わる…あれは土が…、地脈が変わる。草原全体が大きな地の変動に襲われる。蒼の里は…全滅はしないだろうけれど、無事じゃ済まない。人間世界は…想像付かない」

「マジかよ……！」

二人の顔色からどどん血の気が引いて行った。

「何より…湖が無くなる。湖の主殿が命を落とす。巫女が、在るべき場所を無くす」

草原全体の災厄と巫女の心配が同じ土俵なのが、この土壇場でカワセミらしくて笑えたが、二人はそんな余裕、なかった。

「ノスリ…長が来られるまで、もつか・・・？」

「もたせるしかないだろ、相棒・・・！」

「二人とも情けないなあ。ボクが何時間支えていたと思うの？」

しかしここへ来て、歪みの圧力が倍々に増して行っているのが、カワセミにも分かっていった。

時間が無い。

足先で地べたを探りながら歩き回っていた水色の妖精が、歩みを止めた。

「見つけたっ!!」

トンと踵を蹴ると、其処の床がバクンと裂けて、地の底に続く奈落となった。

「将棋倒しの途中を壊して来る。大災害は防げる筈だ」

カワセミは乾いた表情で奈落を覗いた。地の底からの光がその顔を妖しく照らす。ギョッと結んだ口元の緊張から、それがお使いのように簡単ではないのが伺い知れた。

「…出来るのか？」

「やるっきゃないでしょ…」

カワセミは首の後ろに両手を回して、石の鎖を解いた。手首足首の幾重もの鎖も外し、シヤラシヤラと足元に落とす。

「お……おい？ カワセミ？」

「それ、君を護ってくれているんじゃないの？」

全て外してスッキリした姿で、水色の妖精は光に照らされながら、振り向いて微笑んだ。

「うん、ボクを護ってくれた。ボクが壊れないようにって、長の言い付けで着けてただけなんだ。これ外すと、術の力の上限がなくなるから、何でも出来る。待ってて、キミ達すぐ楽にするから」

「おい!! カワセミ……!!」

「カワセミ——!!」

「じゃあね」

水色の大きな目でしっかりと二人を見てから、永遠の相棒は奈落に向かって飛び降りた。

\*\*\*

二人の妖精はショックで声も出せずに固まっていた。

相棒を追い掛けたい衝動に駆られるが、支えている歪みを放

す訳に行かない。

そんな二人の前を、小柄な影が駆け抜けた。

「えっ!!」

ツバクロとノスリは、有り得ない人影に、呆然となった。

奈落に飛び降りたカワセミは、やるべき事を見出だしていた。

「…これが……」

目の前の大きな流れの幹。こいつをぶった斬ればいい。

運命に流されるばかりが生きる事じゃない。たまには自分で変えてやるさ……。

上も下も分らない状況で、両手を掲げた。風と大地の力を

呼んで、緑に光る槍が出来上がる。

相手は途方もなくでかい。一発勝負だ。

槍に自分の全てを込める。

上の二人を、蒼の里を、草原を……巫女を……護る!!

——— !! ———

——— ———

——— ———

——— ———

凄いが身体を駆け抜けて出て行くのが分かった。

「ボクって、凄いいじゃん……」

槍が突き抜け、大きな幹は両断されて散って行く。少ししたら流れは復活するだろうけれど、災厄への将棋倒しは断ち切れた筈だ。

成功したね…、さすがボク。

でも身体力が抜けて、芯から冷たくなるのが分かった。急に眠気が襲い、意識が遠退く。

ごめん、ちょっとこれ、帰れそうにないや……。

最後に、冷たい苦の身体が、ちょっと温かくなった気がした。

……なつかしい……。

奈落に落ちて行くカワセミをしっかり抱き止めているのは、

誰だろう、湖の巫女だ。

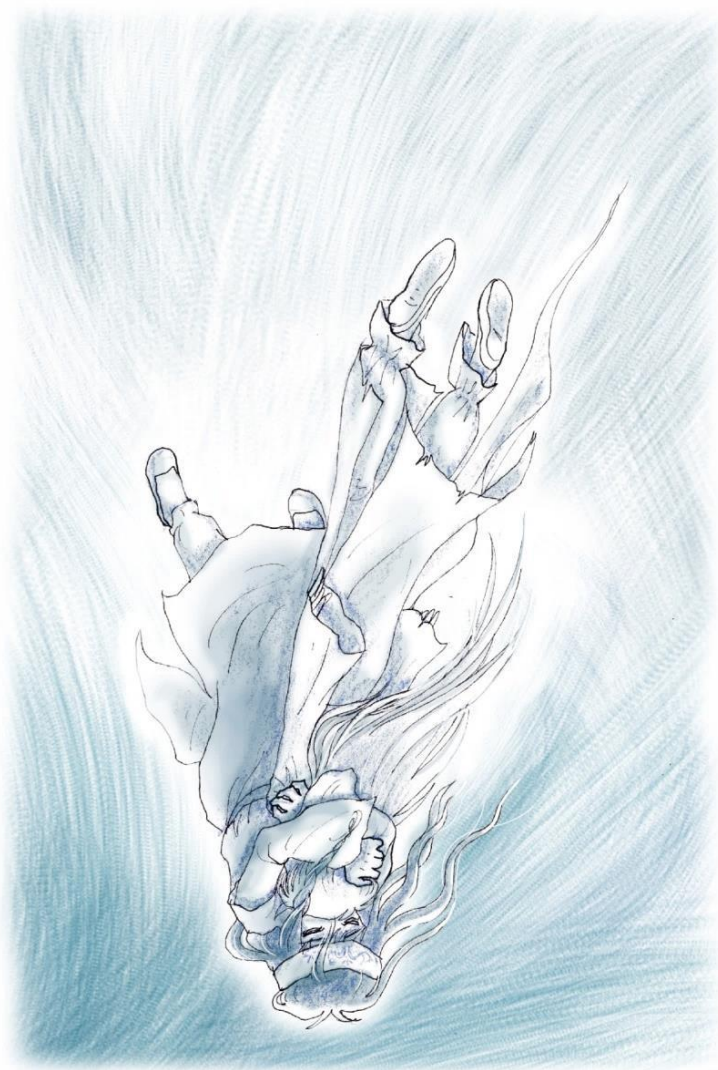
信じられない事に、地上を自分の尾花栗毛で、二人の草の馬を追ったのだ。カワセミを追って躊躇なく奈落に飛び降り、落ちて行く彼を掴まえた。彼女なりの風を必死で起こして底に引

つ張られるのを止めようとするが、如何せん力が足りない。

「このヒト、こんな、華奢だったんだ……」

この期に及んで、そんな事を考えていた。

「春の草原の……匂いがする……」





ふっ…と二人の身体が浮き上がった。

ツバクロとノスリが疲労困憊の顔をして、二人の手を掴まえ上に導いていた。三人は…黙って、唇を結んで、奈落を上がった行った。カワセミは睫毛を閉じたままだった…。

手前の歪みはキビタキが必死の形相で支えていた。さっきまで二人掛かりで支えていたのが、急に半分以下になったのだ。

「キビタキ、もういい…」

ノスリが手を差し出した。キビタキが引っ張り出されて、歪みかすれて落ちるが、それだけで治まった。恐らく、山の麓の無人の部落の幾つかが、土砂に埋まった程度だろう。

地面の裂け目が閉じようとしている。

上昇する速度を上げながら、ノスリはいつの間にかツバクロ並みに風の術が使っていた。それに気付いたのは大分後だった。五人が地上に出ると共に、裂け目は閉じて跡形もなくなった。

地上に着いても、カタカコはカワセミを抱き締めたままだった。その頬を水色の睫毛に押し当てて、ずっと小さく震え続けている。

だってカワセミは冷たいままで、ピクとも動かないのだ。

皆、茫然としている。夢じゃないだろうか……。夢なら……

覚めて欲しい……。

「長……!!……」

キビタキがかすれた声で叫んだ。

夜空を切り裂き鬩牙の馬を全力で駆って、今、蒼の長が到着した。馬が地上に着く前に飛び降りて、駆け寄る。

「……………ワセ…ミ…!!」

長の顔も動揺で揺れている。だけど必死で踏ん張った。自分でまで狼狽えたら、助かる者も逃してしまふ。

巫女が蒼白な顔を上げて、ようやくカワセミを放した。

「長様……………助けて……………夕…スケテ……………」

長は巫女からカワセミを受け取り、急いで額に手を当てた。

皆、息をするのものはかられる様に祈りながら待つ。

目を閉じていた長は、しかしすぐに開けた。

「……………」

その目は暗闇を湛えていた。引っ張り上げる手が見つからないのだ…。

巫女がうずくまって震え出した。キビタキは茫然と立ち尽くす。二人の妖精は、今朝がたの事を幻のように反芻していた。

『ボクが将来的に住みたい所、聞いてくれる?』

…そうだ、カワセミはちゃんと未来を見ていた。こんな未来、予知していなかった筈なのに…。

『命の始まる所…生命の力の集まる所…凄いはじまりの力…』

二人は目を見開いて少し顔を上げた。

……何か……?

『長は許可を出さざるを得ないよ。彼処でないと、ボクは生きられないんだから』

「・・・!!!」

二人は弾かれたように顔を上げた。

「産屋だ!!」

\*\*\*

ツバクロは口笛で自分の馬を呼び寄せた。

「長!! カワセミを!!」

説明をしている暇も聞いている暇も無いのは皆解っていた。

何か思い付いたこの二人に賭けるしかない。

ツバクロは馬上でカワセミを抱えると、腕を振って風を呼ん

だ。その場に——バアアン!! と衝撃が走る。

何とジェット気流を地上に呼び付けたのだ。無茶苦茶をする。

だがツバクロは今までにない最速で、一瞬で消えた。

「長もすべ鬮牙の馬で追って下さい。里の…あの、馬具置き場です—」

吹っ飛ばされたノスリが起き上がりながら真剣な声で言う。

長も立ち上がり、何も聞かず即発進した。ツバクロの術を除くと、純粹に鬮牙の馬は里で一番早い。

残った三人。キヒタキが口を開いた。

「イル、お前、カワセミの馬で里へ行け。尾花栗毛は俺が責任持って預かるから。ノスリ、イルを頼むよ」

「お前は?」

「尾花栗毛は動かしちゃダメだ」

巫女の尾花栗毛はまだ息荒く、目を血走らせて口から泡を垂らしている。主の為に能力越えて駆けたのだ。

「俺、回復するまで見ていてやるから。そんな顔するな、イル、

今だけ甘えなきゃダメだ。カワセミに誰が必要か、考えろ」

ノスリは、こんな時なのにちょっと感激した。あの生意気なガキンチョが、いっちゃまえに、ヒトの気持ちを思いやれるようになったいやがる。

「ノスリ、頼むよ」

「あ…ああ、巫女殿、キヒタキの言う通りだ。乗馬しなさい」

「あ…ああ、巫女殿、キヒタキの言う通りだ。乗馬しなさい」

ノスリは巫女をカワセミの馬に押し上げて、キビタキに敬礼し、二頭で里へ飛び立った。

キビタキは黒鹿毛に跨がり、尾花栗毛を伴って近くの無人の部落へ向かう。馬の水くれ場があった筈だ。

…自分だつてカワセミの側へ行きたい。でもこれが一番の判断な筈だ。誰かが尾花栗毛を見てなきや、イルはカワセミの元へ行けない。

「ちょっと寂しいな…」

久々に逢つた腹違いの姉が、すっかり綺麗になつて、見るからに心寄せる男性が出ていた。

「カワセミだとはビックリ仰天だけれど…、まあ昔っから、どこかネジのハズレた奴だつたからなあ」

泣き顔しか見られなかった。次逢つ時は、笑顔で居て欲しい。

カワセミ…助かるよな。蒼の長と、俺の尊敬する二人の兄弟子が付いているんだ。助からなきや、嘘だ…。

ツバクロは里の馬具置き場のパオの前に直接降下した。

カワセミを抱えて馬から飛び降り、転がるようにパオに運び込む。

「カ、カワセミ…!! カワセミ…?？」

相棒はすっかり冷えきっていた。遅過ぎたのか…? 駄目なのか…?

心…と、空気が震えるのが分かった。

「……………?!!」

目の前の…真つ暗な空間に…黒髪豊かな女性が…幻のように現れていた。驚きも怖さもない。それ程、自然な、当たり前な感じで、そこに居た。

「カタカゴ…?」

違う…似ているけれど、カタカゴとは別人だ。

その女性は、両手を伸ばして、仰向けに横たわるカワセミの頭の側からその頬を包んだ。そして額に唇が触れるかと思つ程に近付いて、何か囁いた。

すう……………と、カワセミに息が戻った。唇が微かに動く。

「……………おかあさ…ん……………」

その直後、長が到着した。

黒髪の女性は消えていた。ツバクロだけが見た幻だったのか

…??

長がカワセミの額と心の臓に手を当て、呼吸を安定させてい

る間に、巫女とノスリも到着した。

馬具置き場を片付けるのはゆっくり少しづつやる予定だったのが、その夜の内に突貫でやる羽目になった。

なんせ怖くて試せないが、カワセミを此処から出すと、息が止まってしまふ気がするのだ。

巫女殿はカワセミにすがって感涙にむせび時間をちよっと賣ったが、その後はツバクロとノスリと一緒に、徹夜の身体にム手打って働いた。

ツバクロは、長に、カワセミの親について聞いてみた。やはりカワセミは両親とも蒼の妖精だという。では、あの黒髪の女性とは？ 動揺した自分の幻覚だったのか？

キビタキの元に鷹の手紙を送ったら、すぐに返事を付けて戻って来た。何だか麓の部落の救世主に祭り上げられて、面倒な事になっているらしい。カワセミが息を吹き返したのを知って、心から喜んでいたが、そっちを治めるまで来られない感じた。

朝になって里の中が騒がしくなり、オタネ婆さんも飛んで来た。憎まれ口をききながら、ありったけの薬を携えて。

驚いた事にフィフィが、パオの内壁の掃除を手伝った。巫女

とは会話しなかったが、あからさまに目を反らすような事はしなかった。

巫女は、カワセミが目覚ますのを見届けて湖に帰るつもりだった。その時は……カワセミは回復すれば目を覚ます……と、誰もが思っていた……。

\*\*\*

彩雲の中を漂うように、周囲の色がテタラメで、輪郭が淡い。

「夢……？ なのかしら……？」

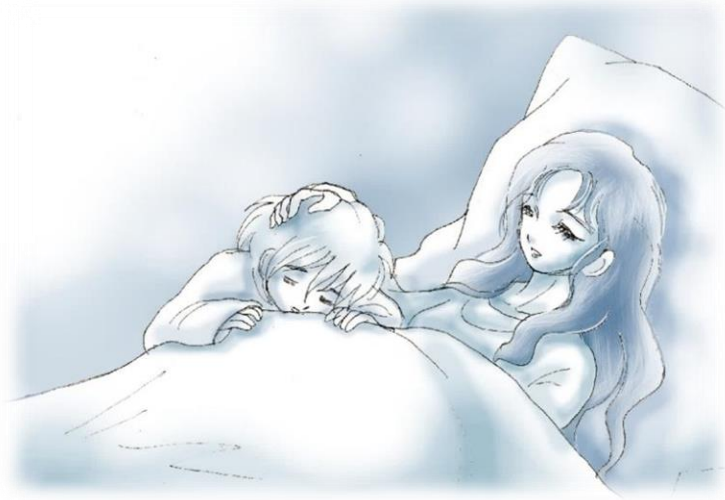
昨日、凄く悲しい事と嬉しい事があった筈なんだけれど、忘れてしまった。カタカコは小さなパオの中の風景を、斜め上の俯瞰(ふかん)から見ている。

ベッドには一人の女性が横たわっている。仰向けのお腹がふっくら丸い。全て淡色の風景の中、音も儂く木霊のように遠い。二重の御簾が細く開いて、逆光を背に、小さな子供が入って来た。ボサボサ頭の、目ばかり大きい、瘦せた、子供……。

「アナタ、ダアし……？」

「サア……ダシカシラネ……」

「オナカ、マンマル……」



「ソウ…オカアサンニナルノ…」

「オカアサン…?」

「ソウ、アナタニモ、イルデシヨ、オカアサン…」

「シラナイ…」

「シラナイノ…?」

「ウン…」

「……………」

「サワッテモ、イイ…?」

「……………イイヨ…」

子供はベッドに近寄り、そおっとお腹に両手を添えて、顔を埋めた。

「アッタカイ…コレガ、オカアサン……………」

すうっと引き戻されるように、カタカコは目を覚ました。

うつ伏せて眠ってしまったベッドには、タバと変わらぬ閉じた水色の睫毛があった。この、本人さえも忘れていたであろう、幼い頃の記憶…。

「初めて逢った時から、このヒトが心配で心配で堪らなかった

の…、今、解ったわ、お母さん…」

自分が長の事を『お父さん』と呼ぶように、このヒトにも『おあさん』と呼ぶ存在が在ったんだ…。

『そして、そんなに前に、貴方に出逢っていたんですね…私…』

蒼の長はひと安心の表情で、非礼してしまった東の民の元へ、再度発った。ツバクロとノスリは、翌日から、待ってくれない任務に忙しく飛び回っている。

敷物とベッドだけ運び込まれた元馬具置き場では、カワセミの側にカタカゴが、聞き分けのない子供のようにピッタリ寄り添っていた。あれから全てのタガが外れて、自分とカワセミ以外、何も見ていない感じだった。

「こ奴は一週間位寝ているのはザラじゃな」

オタネ婆さんはそう言っ、巫女の心配顔を拭おうとしたが、今までの『熱に浮かされて寝ている状態』とは明らかに違つのに、自らの胸騒ぎを押さえられなかった。

夕方帰還したノスリは、ツバクロに報告書を任せて、カワセミのパオに急いでいた。と、パオの入り口に向いて、フィフィが仁王立ちしている。対面してカタカゴが、口を手を当てて涙

をこぼしているではないか。

「おい、フィフィー！ 巫女殿に…」

ノスリが怒った声を出して走り寄ると、フィフィは盾を上げて駆け去った。

「巫女殿、気にせんで下さい。あいつ、子供っ気が抜けないだけで…」

カタカゴはびっくり顔で、慌てて首を横に振った。その手には、きれいな結び目の風呂敷包みが抱えられていた。

カワセミのパオより南寄りの大きな干草置き場。この一角が新たな馬具置き場になった。

フィフィが端から頭絡を掛けている。

「おう………」

戸口の明かりを塞いで、大男が入って来た。

「すまなかつたな…」

お回子娘は振り向かず作業を続ける。

「どうせ男共は、そーゆー事に気が回らないでしょうと思っただけよ。蒼の里が野蛮でデリカシーのない集団って思われたら嫌じゃない。暗いから、そこどいてよ」

「あ、ああ…わりの…」

ノスリは逆らわず、素直に端入避けた。

フィフィは巫女に、新しい肌着や自分のお古の寝間着を、わざわざ届けてくれたのだ。後、水あみ場は夕方過ぎは誰も行かないから、使うならその時よ、等と氣遣いされ、巫女はそれまでの心細さもあって、感極まって泣き出したのだった。

ノスリも黙って共に作業を始めた。

「仕事から帰って早く巫女に会いたかったんじゃないの?!」  
いつもは口喧嘩になる険のある言い方だが、今は何だか腹が立たない。

「ん? いや、…ここでもいいんだ」

ノスリは黙々と鞍を運ぶ。頭絡を掛け終えたフィフィが振り返り向いた。何でかその目は涙で膨らんでいた。お、俺か? 俺が悪いのか? 俺、何か、泣かすような事、言ったか?!

「わ、私も、髪、降ろそうかな…!」

「ふえっ?!」

唐突な問い掛けに、間抜けな声が出た。

「だ、だって、あーゆーのが、好みなんでしょ?! 私も、髪降ろして、腰まで伸ばせば、あーゆー風につ、なれるわよっ」

なんて厄介なんだ、女の子って生き物は?! 髪型がどーとかじゃない位、フィフィにだって分かっている筈だ。こんな時、

どー答えりゃいいんだ?

『女の子って、迷子になっちゃうんです……!』

以前巫女殿に言われた言葉を思い出した。…そうか…迷子になっているんだ。だったら見付けてやりゃいい。

「おう、お前はお団子がいいぞ」

「えっ……?」

「お前は世界一お団子が似合う。俺はお団子の方が好きだ。一生お団子でいろ」

ノスリは何だか一生分の『お団子』と言う単語を使ったような気がした。

その翌日、蒼の狼と共に、やっとキビタキが訪ねて来た。

狼は里へ入らず草の馬とハイマツの丘で待っていたが、長の代理として対応したツバクロに見舞いを述べた。

「今度は国境の大河の夕陽をお見せしますと、お伝えください」  
彼女もカワセミを不思議に好きな一人なのだ。

赤毛の皇子は、カワセミが息をしているのを見て、心からホッとした。尾花栗毛は王都で大切に預かっているから、湖に戻ったらいつでも言うてね、帰す口実で遊びに行けるから…と、おどけて皆を笑わせた。

「ただ……」

一拍俯うつむいて、深刻そうに、

「うちの黒鹿毛がご飯も喉を通らなくなっちゃう。尾花栗毛に完全にイカシちゃってんだ!!」

「ここでやっとカタカゴの笑顔もゲット出来て、満足顔で帰って行った。」

夜になってから、東方より長が戻り、カタカゴは長の執務室に呼ばれた。ツバクロにノスリ、オタネ婆さんもいた。沈痛な空気に、胸がどくんとして喉がカラカラになる。

「東の民に、あの亀裂の事を知っている、古い部族がいました」  
皆、顔を上げて長を見た。

「あれは大地を動かし災厄と再生をもたらす大いなる力。とてもヒトの力で抗える代物ではないと」

「だって、カワセミは……」

「もし、そのエネルギーを曲げる事が出来たのなら、その者は過大な犠牲を払ったのでしょ」と…、命か…それに近いモノ……」

「……………」

ツバクロもノスリも奈落へ飛び降りるカワセミの目を思い出しました。

「それ……って……」

「まだ五日目です、まだわかりません……。だけど……そっちの場合も、私達は覚悟をしなければなりません。カワセミは、残りの寿命、目覚めて活動する全ての力を、使い切ってしまったのだと……」

長が口に出すという事は、…多分『そっちの場合』本決まりなんだ……。カタカゴがよろめいて長椅子に寄り掛かった。オタネ婆さんも、下を向いて目をしばたいている。

ツバクロとノスリは頭の中が真っ白になった。

三人で長を継ぐ筈だった。自分達の未来はカワセミと共に歩く物だった。要のカワセミが欠けて、どうやって長を継げよう。よしんば他に能力者が育ったとしても、…自分達にはカワセミなのだ。カワセミ以外考えられない。

欠けて初めて、如何にかけがえのない相棒だったか、思い知らされた。そう…身体の一部をもぎ取られたようだ…。

そんな二人を、乾いた横目で、ツ・とカタカゴは見た。

話が終わり、皆、重い空気の中、家路に向かった。カワセミのバオに寝起きするカタカゴは、一人皆と方向が違うのだが、別れ際、視線を反らしながらツバクロの袖口を引っ張った。



「……C……」

寝付けなかったノスリもさすがに連日の疲労からイヒキをかき出し、ツバクロはようやく寢床を抜け出した。夜闇の中にカントラの細い明かりの見えるカワセミのパオに滑り込む。

「何だっというの？」

巫女のただならぬ気配に、ツバクロは急いで聞いた。

「ツバクロ殿…風出流山かぜいするやまはご存知ですか？」

カントラで逆光になった巫女は、表情が分からないが、いつもと明らかに声音が違つ。

「………行った事はある……」

「では、中腹の神殿は……？」

巫女にとっては大きな賭けだった。もし長に聞いた事があるなら、アウトだ。

「何、それ……？」

「……………」

……セーフだ……。

巫女は、これから自分がやろうとしている事に、目眩がした。

ツバクロは怪訝な顔で覗き込む。何処まで話せばいいんだらう。

このヒトに長を裏切らせる訳には行かない……。

「連れて行って下さい……」

「…理由もなしに……」

「はい…理由なしに、です……」

沈黙が流れる。

「……………分かった」

「ごめんなさい……………」

粛々と夜の里を歩く。

カタカゴは長の寢室を見た。ごめんなさい…お父さん……。厩舎からそっと馬を曳く。二人乗りで静かに上昇する。

ジェット気流に乗り、里が見えなくなって、初めてツバクロが口を開いた。

「往復だけなら夜明けまでに帰って来られる」

「…はい、ありがとうございます」

「…理由、話してくれる気にならない？」

「……………」

「カワセミ…の為…だよね？」

「助かる可能性を、尋ねに行くのです」

「あるかもしれないのっ？ 可能性……」

「は……」

「…分かった!」

程なく、凍り付いた山々が連なる、西南の山岳地帯が広がる。一番高くそびえるのが風出流山だ。

「その、棚です」

氷漬けの、大きな一枚岩の前に降り立つ。尋ねに来たと言いが、何者かが住んでいる感じじゃない。

「ここに、何があるの? 本当にここにいのの?」

「見えないんです。覚悟のない者には…」

「ふふ」

「待っていて下さる…」

カタカゴは氷壁に向かって歩を進め、ある地点で見えなくなった。

真っ暗な中、ツバクロは所在なく待った。山鳴りがゴウゴウしている。自分ほとんどもない事をしているんじゃないのか?

少しの時間の後、カタカゴは闇の中から姿を現した。

「お待たせしました」

その顔は、来た時の危うい感じのままだった。

「分かったの? カワセミを助ける方法?」

「……………」

「駄目だったのか?」

カタカゴは黙って唇を結んでいる。カワセミを助ける為に動いているとしたら、彼女の様子はおかし過ぎる。

「ねえ、カワセミを助ける可能性があるなら、まず長に言っただろう?」

ツバクロは待っている間に、これは聞いておこうと決心していた。

「長に言えないって…それは…」

「いえ、聞けるかどうか分からなかったから、カワ喜びさせたくなって…。やっぱり駄目でした」

「……………」

「帰りまじょう、無駄足させてすみませんでした」

カタカゴは抑揚なしに喋った。彼女の声なのに、知らないヒトみたいな乾いた口調だった。

\*\*\*

帰りの馬上で、カタカゴは一言も喋らなくなった。ツバクロに後悔が襲って来た。巫女をそろ恐ろしく感じる時が来るなんて、思いもしなかった。

草原上空に差し掛かり、シエット気流を抜けようとした時、

急に彼女が声を出した。

「ツバクロ殿、このまま飛んで下さい」

「えっ？ 里を通り過ぎてしまう…」

「はい、私を、里ではない所で降ろして下さい」

「……………」

「どこでもいいですから」

ととうとツバクロは我慢出来なくなった。

「それは駄目だ!! 何を考えているか知らないけれど、それは

絶対に出来ない!」

彼の勤が全力で、異常事態の警報を鳴らしていた。

「降ろしてくれないなら、飛び降りちゃいますよ……………」

「……………」

背後の巫女の声の最後が歪んで、背筋が泡立った。やばい!

本当にやばい…!! 掴まっていた彼女の手が離れた。

南無三!! 乗り手の咄嗟の合図で、馬はガクンと急降下した。

「あっ!」

馬に置いて行かれて宙に浮いた巫女を、ツバクロが素早く手

を伸ばして脇に抱えた。そのまま彼女に何をさせる間も与えず、

馬もろとも地上めがけて落っこちた。

「うおっ!」

今度は、ツバクロの指示ではないのに、馬がいきなり里の方へ引っ張られた。草の馬に対してこんな術が使えるのは、あのヒトしかない。

「長だ!」

ツバクロが呟くと同時に、巫女が海老みたいに暴れた。

「くっころっ!」

二人して馬から投げ出されたが、これくらいの高さなら…。

巫女をしっかりと抱えたまま、ツバクロは風を呼んだ。

—— ぐしゃっ ——

……………

草の深い所を狙ってうまく足から着地した筈だったのに、直

前で何かにぶつかって、ひっくり返った。

「お、長あ!!」

ツバクロは泡喰って、下敷きになっている長の上から離れた。

「あ、あの…すみません、すみません」

恐らく蒼の長の意に背く事…をしかしたのは、初めてだ。

おまけに尻の下に敷いての帰還。

しかし次の瞬間、息せきぎった手が、彼の両腕を握ってきた。

「よくこの子を連れ帰ってくれました…、よく…」

いつもは髪一本乱さない冷静な顔が、真っ青だ。『どんな高さから落ちたってツバクロだったら大丈夫』……って事すら忘れる程、慌てふためいて駆けて来たのだ……。

興奮している二人とは裏腹に、固まった表情のまま、巫女はフラフラ立ち上がった。長がその前に立ちほはだかる。

「待ちなさい」

「……」

「風出流山かぜいまるやまの神殿……ですね」

「は……」

「貴方ってヒトは……」

「……私は……ツバクロ殿の優しさを利用して、自分だけの考えで禁忌を犯しました。ここに居る資格はありません。だから出て行きます」

「……えっ、ちよっと、カタカゴ……」

おろおろするツバクロを尻目に、巫女は本当に立ち去ってしまっただ。長が素早く回り込み、決まて行かすまいという風に、両肩を掴んだ。

「二年前『あんな事』があった後、私が神殿を調べなかつたかでも思っているんですか？」 『あの連中』に何を聞いて来たん

です？、どうせろくでもない戯言でしょうが」

「いいえー」

巫女の能面みただった顔が、色をおびた。

「カワセミ殿がああ『護りの羽根』を持つ資質があるのかどうか、聞いて来ました。湖で又シ様と対峙した時、背中に天使みたいに透明な羽根が見えたんです。やはりそれが、資質の証ですって」

ツバクロは、長が自分に対して動揺しているのを感じた。そうか、これは禁忌なんだ……。

「聞かない方がよいなら、はずします」

長は一瞬考えてから、ツバクロに向いた。

「彼処へ楽に飛べる貴方は、知ってはいくはないけないでしよう。むしろ早くに教えておくべきでした」

棚上げしておいたから、カタカゴにあらぬ考えを持たせてしまった。

「あそこ、何なんです？ 僕には何も見えませんでした」

「見えない方がいい。先祖の過ちの場所、呪われた地です」

「でも……私はすぐりました。そして答えて貰えました」

こんなに長に口ごたえするカタカゴは見た事がない。長は哀しそうに、その言葉を遮った。

「許しません…」

カタクロは夢見るように首を傾げて、そして微笑んだ。

「どうして…？ 私が羽根になってあのヒトの護りになったら、あのヒトは目を覚ますんですって。またあの水色の目を開けるんですよ。こんな嬉しい事、ありません」

ツバクロは、さっき背筋が泡立った理由が分かった。『羽根になる』って事が、うっすらと予想出来たからだ。この娘は、帰る道々、そんな恐ろしい事を考えていたのか。

その時、カワセミのパオから赤い髪が飛び出した。王都に居る善のキビタキ？!

「大バカ!!」

言うが早いか、両手を大きく開いて、勢いよく巫女の両頬を挟んだ。バシン!! と豪快な音が響いた。

「お前は何者だ?! 何の為にここに居る?! この短絡バカ!!」  
叩かれて目の前に星がチカチカしているカタクロを、一気に引き戻すように、赤毛の皇子はまくしたてた。

「そんなのな! 一見、尊いようで、実はいっちゃん楽で無責任で面白い考えなんだ! 羽根を持たされた者の気持ちを思い計った事があるか?!」

「……………」

「一瞬でも間違ってお前を背負っちゃまった俺だから分かる。気が狂いそうな『重さ』なんだぞ。あの神経虚弱なカワセミが、そんなモン背負わされて、まともに生きて行けるか? 絶対、人生後半廃人だぞ。もっとちゃんと考えろ!!」

長もツバクロも、彼の勢いに、ただただ圧倒された。よくこれだけボンボン出て来るもんだ。

両手で頬を挟まれたままの巫女の目に、だんだん焦点が戻って来て、そして、彼女は頭(こっぺ)を垂れた。

「…ごめん…なさい……………」

西の森に住まう蒼の狼が、夜半に風出流山に向かう草の馬を察知した。キビタキはそれを知らずに、母の馬を借りて夜闇をすっ飛んで来たのだ。

四人は灯のともったカワセミのパオに入り、絨毯の上に車座になった。

「そんな馬鹿な方法より、もっと良い道が見つかるかもしれないじゃないか。何の為に長やオタネ婆さんがいるんだ。無駄に長生きしている訳じゃないんだぞ、このヒト」

ツバクロにはヒヤヒヤものだが、長はキビタキの存在に感謝

していた。カタカゴから、さっきまでの氷みたいな頑固な表情が失せ、昔の泣き虫イルに戻ってしゅんとしている。

「・・・たぐ、いつまでもアンポンタンなんだから。いい加減、姉貴らしくなってくれ!!」

「ここまで、長は、話に付いて行けないツバクロの為に、いちいち注釈を付けて説明していたが、この時、

「あ、カタカゴのお父さん、モンゴルの大王ね」

と、さらりと入れて、ツバクロの頭はとうとうオーバーフローを起こした。

外が薄明かるくなってきた。

「わい・・・」

長がカタカゴを覗き込む。

「考えを改めてくれましたか?」

「はう……」

巫女は恥じ入って小さく頷いた。

「人間のお母さんが、離れた所で亡くなって、あの方の羽根になれたのなら、私だって案外簡単になれるんじゃないか……?」

って、思っちゃったんです」

長は、これについてはツバクロに注釈を付けなかった。

「簡単、なんですか……?」

ツバクロはつい、好奇心を口に出した。

「はい……」

\* \* \*

「本当に簡単でした。命の途切れる時、護りたいヒトを強く想う……、それだけでよかったです」

「え……それだけ? ……だったら羽根のあるヒトだらけになっちゃう?」

カタカゴはちよつと苦笑した。本当に優しいんだ、このヒト。

長が先を引き受ける。

「受け取る側に『羽根を持つ資質』が必要なんです。それは遣伝かもしれないし、別の要素があるのかもしれない。蒼の里が有翼人で溢れ返っていない所を見ると、ごくまれ、なんでしよう」

そして愛弟子を見させる。

「ツバクロ、厳しいですけど、ノスリにも黙っていて下さい。

羽根のもたらす力の割には、簡単過ぎるんです。だから禁忌なのです」

「ノスリにも……ですか?」

キビタキが口を挟んだ。

「ノスリにとつてのカワセミの存在を考えたら、知らない方がいい。ノスリ、きつと苦しむ。カワセミの事を護りたいと強く想って命を絶つだけで、カワセミを助ける事が出来るなんて。誰にでも簡単に出来ちゃうからこそ恐ろしいんだ。そんな事、カケラたりとも広めちゃいけない」

一気に喋ってカタカゴを睨む。

「すみません……」

ツバクロは彼女の横顔を眺めながら、背筋がヒヤツとした。自分だって神殿の事を知っていたら、同じ考えを持ったかもしれない…。確かにこれは、広めちゃいけない。

長は大切な『娘』の肩を、もう一度しっかりと掴んだ。

「皆だけでなく、カワセミにも謝りなさい。二度とそんな気を起こさないと、彼に誓って下さい」

キビタキもツバクロも頷うなまじいた。カワセミに誓わせるのが一番だ。

カタカゴは素直に立ち上がってベッドに近付いた。穏やかに閉じられた水色の睫毛を見つめると、このベッドに何てモノを背負わせようとしたのか…。自分の恐ろしさに胸の底から震えが来た。

「ごめんなさい……」

心から言っていて、ベッドの上の細い手を震える両手で包んだ。床の三人もひとまずホツとした。

「あっ…あ・あ・あ・あ…!!」

いきなりカタカゴが叫んだ。三人、跳ね起きてカワセミを覗く。しかし水色の妖精は変化しない。目を見開いて恐ろしいモノを見た顔をしているのはカタカゴだ。

「どうした?」

キビタキが姉の肘を掴んだ。その先の手は、まだカワセミの指と絡ませている。

「…馬具置き場…!! 新しい馬具置き場です!! あそこは!!」  
叫んで、絡めていた指を離して、出口に向けてフラフラ歩き出した。

「…長、行きます!!」

何か察して、ツバクロが飛び出した。キビタキも後に続く。長は残ってカタカゴを抱き止めた。

「どうしたんです? 落ち着いて…落ち着いて…」

額に手を当てると、カタカゴの開いていた瞳孔が元に戻り、気管につっかえていた息を大きく吐いた。

付いた。握りしめていた鍬が彼の腕をかすめる。

「何やってる!! 何を…!!」

押さえ付けたノスリの手の下で、娘は目の焦点も合わずにただ震えている。

長も来て、その有り様に顔色を変えた。

「フィフィ…」

ノスリが手を緩めて、娘を抱えて起こした。長が屈み込んでその額に手を当てた。

「落ち着いて…ゆっくり息を吐きなさい…ゆっくり…」

フィフィは、まだ目を見開いて、まばたきもしない。

「長、こいつ…こんな事するタマじゃありません!! 悪い呪いか、魔物に憑かれたか…」

ツバクロが、ノスリの肩を触って、黙って首を振った。

「…おい、どついう事…なのか…?」

「……………ノスリ……………?」

フィフィがやっと我を取り戻した。長はフィフィに優しく尋ねる。

「バオの外で…話を聞いてしまったのですね?」

娘は、声の出し方も忘れたように、たどたどしく答えた。

「見…見えたんです…、突然、頭の中に…」

「……………?!」

長はカタカゴの頭を撫でながら、焦然とヘッドの妖精を見下ろした。カワセミはやはり静かに眠っている。

ツバクロとキヒタキはとにかく馬具置き場へ走った。

角でノスリと鉢合わせする。

「おう? 起きたらお前おらんし……………」

「ごめん…!!」

二人、言葉少なに駆け抜けた。

「おおい!!」

よく分からないままノスリも追い掛ける。

いつの間にか朝陽が昇りかけて、オレンシに照らされる馬具置き場の入り口を跳ね上げる。

「……………!!」

オレンシの細い光の中、オレンシ色の毛糸で髪を結った娘が、工具箱の鍬きり(こ)を握りしめて、ガクガク震えている。その尖端は、喉に押し当てられていた。

「……………!!」

後ろから飛び込んだノスリが、二人を突き飛ばして娘に飛び



「ごめ…なき……ノスリの…名前…出たから…つい…」

その後のキヒタキの言葉を聞いてしまったのは想像出来た。

ノスリ以外の皆、凍り付く思いだ。カタカゴならともかく、この娘がこんな真似をするなんて？

「だ…だ…、ノスリが…タへ…死にそんな顔で、長の所から出て来て…、ノスリのある顔、見た事なくて…」

フィフィのビー玉のような目から、涙がポロポロこぼれた。

「わ、私がやらなきゃ…、ノスリが自分の命、使おうとしちゃう…、ダメだよお、そんなの…」

\*\*\*

「貴方だって駄目です」

長はなるべく感情を抑えて答えた。

「ノスリは喜びませんよ。カワセミだって、ツバクロだって…

私も…誰も、喜びませんよ……」

それでも声の震えは抑え切れない。

「長!! どういう事なんです?! ツバクロ! 教えてくれ!!」

一人事情の分からないノスリが、焦れて叫んだ。こうなったら彼にも打ち明けるしかないだろう…と、三人顔を見合わせて困っている間に、先にフィフィが口走った。

「誰かの命で、カワセミを助ける事が出来るって。恐ろしい事

だから内緒にしよう…って、長様達が話してるの、聞いたの」

ノスリは茫然とした。

「そりゃ……そりゃ、また……」

長は頭に手をやって首を振った。

「もう、たくさんです! ツバクロ、解ったでしょう。何で禁忌なのか。一見便利なようで、皆が自分勝手に恐ろしい事に走ってしまふ。そもそも亡霊ともが何でカタカゴに簡単に教えたか? 自分達を封印した風の民の末裔が、結局、欲に駆られて神殿に戻るのを、手ぐすね引いて待っているんですよ。羽根ひとつ野に降ろせば、それが起りうる」と目論んでいるんです」

長は心底憤っていた。これは地味に密かに里に忍び寄る侵略なのだ。ヒトがヒトを愛する心につけ込んで。

フィフィは長の言う事の半分も理解出来なかったが、下を向いて拳をキュッと握って、粛々と聞いている。

朝陽が昇りきり、辺りはすっかり明るくなった。

皆にコンコンと説教されたフィフィは、カタカゴよりは素直に思い直した。

「まったく、なんだってそんな事を…こんな所で……」

ノスリは肩を下ろして馬具置き場を見回した。

「だって…一番の思い出の場所だもん」

「思い出？」

新設されたばかりの馬具置き場か？」

「告白して…貰った。ノスリに、昨日…。凄く嬉しかった場所だから」

皆『え？今なんて？』という顔をした。当のノスリが一番びっくりしている。

「ノスリ、何だったの？」

ツバクロが単純に好奇心で聞いた。ノスリ本人だって知りた  
い。

「世界一好きだって。一生俺の好きなお前でいろって」

「……………」

いや、そんな単語は喋ったが…配置が違う！ 第一『お団子』  
が抜けている!!

後々ツバクロに、女の子って自分に都合のいい単語しか聞いて  
いないから…と教えられたが、後の祭りだ。

皆、ほおほお…と言つ顔で穏やかな祝福ムードだ。

「いや、それは、ちが…………」

カタカゴが入って来て、ノスリは言い訳の機会を失した。

「フィフィさんに…、カワセミ殿が、話をしたいそうです」

「え…………」

全員ほぼ同時に声をあげた。

一同カワセミのパオに戻り、カタカゴがフィフィをベッドサ  
イドに導いた。眠ったままのカワセミの右手を握って、フィフ  
ィに差し出す。

「頭の中へ直接話をされるそうです」

そんな事…………出来たのか？

一同呆気に取られる中、フィフィは恐々その手を握った。

お団子娘が目を閉じた。時間にして数秒…………心…と手を離し  
て、どんな話をしたのかと、皆が戦々恐々と視線を向ける中…。

「あれ？」

フィフィは頓狂ごんきょうな声を上げた。

「私、いつパオに入ったっけ？」

そして室内の人数が多いのにたじろいだ。

「そう、これ、これを貴方にあげようと思つて来たのよ！」

今初めて会ったようにカタカゴに向いて、ポケットから小  
さな櫛を出して手渡した。

「…ありがとございます…………」

カタカゴは目を細めてフィフィをじっと見つめた。

「…じゃ、じゃあねっ」

お回子娘は皆の視線が痛いのか、慌ただしく出て行った。

「…どういう……？」

ノスリが首を傾げ、カタカゴが説明した。

「カワセミ殿の判断です。長の一番弟子として、フィフィさんは、パオの側に近付いた後の事は、覚えていません」

そんな事…いつの間に来るように……？」

長はカワセミの近くへ行き、その頭をくしゃくしゃと撫でた。

「カワセミ…貴方……」

今しがたフィフィが離れた手を握る。

「眠っていても変わらないのですね。さすが貴方です。あの娘は知っていても不幸にしかならなかったでしょう」

次の瞬間、長は、カワセミが自分に褒められる度にどんなに喜びを感じていたか、初めて知った。心一杯にそれが流れ込んで来たのだ。

「貴方……あなた……」

長はもう一度細い手を握り締めた。

「私も…さっき初めて気付いたんです」

カタカゴが噛み締めるように言った。

「言葉でなく、心で直接このヒトと、お話する事が、出来たんです」

「ほ、本当かっ?！」

ノスリが浮き足立った。ツバクロだって、キビタキだって、順番待ちするように、ベッドサイドに駆け寄る。

「もう、眠ってしまいました」

長は顔を上げて細い手を降ろし、毛布を掛け直してあげた。

「力を使うと寝ちゃうのは、いつも通りですね…」

三人はガツカリした。しかし次の瞬間、胸に希望が満ち溢れた。こいつは、今だって、自分達と共に生きているんだ。

カタカゴが、すう…とカワセミの頭近くに歩み寄った。

「長様、お願いがあります」

「何です?」

長も背筋を伸ばして、真顔で娘に對峙した。

「私、やはりカワセミ殿の『羽根』になります」

一回びくと揺れた。この娘は……まだ!!

「カタカゴ…!!」

長が娘を見据える。しかし巫女は物怖じせず凜と続けた。

「このヒトの側にずっと居て…、このヒトを護り…、このヒト

の声を皆様に伝える、依り代よりのしごととなります。人間としての人生一杯、このヒトの羽根として、共に生きます。それが、私の、『在るべき場所』です」

\*\*\*

長は何も言わず娘を見つめる。

「どうか人間の身で、里に身を置く事の、許しをください」

答えられなかった。だって、…この娘はまだ、十六になったばかりなのだ。

「如何に長といえども…その事は勝手に決められません…」

そう言って、保留にした。ツバクロとノスリは、長の戸惑いようが解らなかった。そんなに難しい事なんだろうか？

「じゃあ俺が、人間の領主として前倒しで決めてやる。お前は、人間の住処から出て行く事を許可する。ほら、後は里の連中次第」

キビタキはそう言って、抱き締めたいほど一途な姉貴の面肩をポンと叩き、朝陽の空を王都へ帰って行った。洒落た事を言えるようになったもんだ。

「駄目なんですか？ 長…」

執務室でツバクロとノスリが今日の書類を見ながら尋ねる。

カワセミがない分、休んでいる暇がない。

「里の古い大人なんて強引に押し切っちゃまえばいいんだ。そもそもカワセミは里と草原全体を救ってああなったんだ。それで好きな女の子に枕元に居て貰う位の事、認めてやんなきゃ」

ノスリの言いようは豪快で、赤面する程そのまんまだ。ツバクロも苦笑いしつつ賛同する。

「僕もそう思います。何ならフィフィとか僕の親族位なら、僕が説得して、此処に住みやすいように…」

「そうじゃないんですよ」

長は書きかけの回覧状から顔を上げた。

「そういう問題じゃないんです。貴方たち、思い返してご覧なさい。カタカゴが人間である身にケジメを付けて、頑なに里へ足を踏み入れなかった事を」

二人は顔を見合わせて頷いた。確かにそうだった…。

「その彼女が、今度はこちら側の住民になると言う。それはね、あちらと切れる…って意味なんですよ。里から足を踏み出さず、人間の家族とも二度と逢わない…という決意なんですよ」

「そんな……………」

二人啞然とする。

「だって、そんな掟がある訳じゃないし…」

「あの子はそういう娘なんですよ。岩塩のように頑固だ。誰に似たんだか…」

ああ、頑なに口を閉ざして、名前すら語らなかつたあのヒトに……………」

「……………」

長は回覧状を書き終わつた。里の古い大人に回して、今晚説明の運びになる。やれやれ……………」

\*\*\*

湖に訪れる一人の男性がいた。

馬を降りて、湖畔のお堂と庵に近寄る。庵は、冬囲いの準備が途中だった。暖炉にはもう何日も火が入つた気配がない。

小さなコップに花が生けてあるが、水がなくなりしおれてしまつて、何の花かも判らない。

「どうしてしまつたんだ……………」

娘が湖の水神を奉る巫女になると言い出した時は、驚いて反對もしたが、それまで死んだようにあやふやだった表情が、生き生きしたしたので、これでよかつたのだと思つていた矢先だ。

庵には殆どの物が残されていた。あの青い絹衣装の一揃いだけがなくなつてゐる。

男性は庵を出て湖に向いた。娘は水神が住むと言つていた。

湖は波ひとつなく、穏やかに凪いでいる。肩を落として、最後にお堂に向かう。

「娘を……………」戻して下さい……………」

不意に背後に気配を感じ、大きな水音がした。

「フリムクナ……………」

地の底のような声。

男性は硬直する。

「フリムクト、コトワリガ、クスレル。」

ワレガ、ヒトト、カカワルノハ、コトワリニ、ナイ」

湖の水神…？ 本當にいたのか…！

「ミコノ、シンソクカ？」

「は、はい……………」

「アレハ、ヨイコダ。ワレモ、セワニ、ナッタ……………」

「い、今、何処に……………」

「ココニハ、モウ、カエラヌ。」

「ワレテ、カゼノカミノ、ソバツキニ、ナッタ」

「そ……………」それって……………」死んだって……………」事……………」？」

「シンデハ、オラヌガ、オナジコト。」

「ウツヨニ、モドラヌ。ダガ……………」

「は、はい……」

「オヌシラ、シンソクニ、レイラ、コトツカッタ。

シブンハ、シアワセダッタ。ホントウニ、アリガトウト」

それきり静かになった。

男性は振り向いたが、湖面は凧いでいた。今さっきまであんなに水音がしていたのに……。

もう一度お堂に手を併せる。

「あの娘を、宜しくお願いします……」

目を上げると、林の奥の低い枝に、何かの視線を感じた。もう一度良く見たが、やはり誰も居なかった。

庵のしおれた花を、懐に入れる。娘が最後に生けた花だ。家族に持って帰ろう……。

灰色の低い空から、白い物が舞い落ちる。それはたちまち辺りの空間を冬の匂いにし、湖畔を真っ白に染める。

「風花(かざはな)はなだ……」

男性は馬に跨がって家路をたどった。

風が運んで来たあの赤子は、家族に沢山のモノをくれて、…  
そしてまた、風の元へ帰って行ったんだ……。

風花は空を森を湖を覆い、草原に冬が訪れる。



\*\*\*

蒼の里の穏やかな朝。

「起っぎろ——っっ!!」

甲高い声がパオの天井に響き、ノスリとツバクロは、眠りの世界から叩き出された。大きなカゴを抱えたフィフィが、無遠慮にドカドカ入って来る。

「朝は一日の要よ!!」

真ん中のテーブルに、自宅から運んだ朝食がドカドカ並ぶ。

「朝っぱらからそんなに食べられないって…」

ツバクロが寢床でうつ伏せながら、小声で呟く。

「おーい、フィフィ!」

ノスリもまだ寢床で転がりながら、開け放たれた窓に目をシバシバさせている。

「俺はともかく、ツバクロが可哀想だが。年頃のオトコノコだぞ。朝の襲撃は勘弁してくれ」

「ノスリ…君が言うつと何か卑猥に聞こえるからやめてくれ…」

寢床で粘る二人のオトコノコは、敢えなく寢具を引っぺがされ、食欲のない食卓に追い立てられた。

フィフィはバタバタと洗濯物をかき集めたり寢具を干したり、女肩取りに余念がない。

お回り娘を眺めて心底困り果てている相棒に、サジをクルクル回しながら濃い縁取りの目の青年は話し掛けた。

「ねえ、ノスリ」

「あん?」

「今から思うとき、カワセミの魔除けグッズって、ちゃんと効いていたんだよな」

「…は、は・・そうだな…」

二人は奥のガランとした空間を見る。他は手狭なのに、そこに物を置く気にならない。フィフィだって置かない。

馬具置き場でのフィフィの大きいなる勘違いを、ノスリは訂正しなかった。

「カワセミに頼んでさ、前日の記憶まで消して貰っちゃおうぜ」

冗談めかして言うツバクロに、意外や、真顔で、

「いや、いいんだ…」

と返して、拍子抜けさせた。

オレンシの細い光の中、錐を握り締めて震えていたフィフィの姿が、目に焼き付いて離れない。このしよっちゆう迷子になる娘を捜して歩く人生も、そう悪くないな…と思いは始めている。

パオを出ると、うっすらと雪が積もっている。昨日の夕方の初雪から降ったりやんだり、灰色の低い雲が、長い冬の訪れを知らせている。

執務室の入り口で声を掛けるが、最近、長の返事がワンテンポ遅れる事がある。そういう時は、机に向かって膝に片手を置き、ぼおっとしている。その辺りが長の、何か、物思いのツボなんだろう。

仕事の割り振りを話し合い、ツバクロとノスリが執務室を出ると、外で、頬を紅潮させた、幼さの残る面々が待っている。それぞれに、指導する小さな弟子達と、別々に仕事に向かうようになった。

下の道を、山ほどの書物を抱えたフィフィが、手を振りながら通り過ぎる。修練所の修士を学んで、来年から教官補佐になるらしい。ちょっと信じられない。

「あいつに指導されるガキンチョが可哀想だよな」と、ぼやくノスリに、ツバクロは笑いを返すが、

『ノスリに恥ずかしくない女性にならなきゃ!』

と、従妹が張り切っていたのはナイショだ。

里の奥の人氣ひとけのない場所の小さなパオは、時間の流れから切り取られたように、静かに佇む。

一通りの雑務を済ませた長がパオを訪れるのは、いつも昼過ぎた頃だ。

薄暗いパオの奥にベッドがあり、脇に揺り椅子が一つ。長の来訪で、揺り椅子の人物が立ち上がる。

「ご機嫌宜しゅう、長様……」

空色の衣装をきっちりまとったカタカゴが、御簾の隙間の少しの明かりに微笑む。こちらも、ベッドのヒトの世話が終わって一段落した時間だ。

眠れるヒトの身の回りは、キレイ事で終わらない。大家族で慣れているから大丈夫です……と、巫女はオタネ婆さんも驚くほど、キッパリこなしだ。生真面目な巫女殿に丁寧に櫛げずられて、何だかカワセミは、以前よりこざっぱりになっている。

この巫女は、カワセミが目覚める日が来ると信じている。目覚めた時に上手く動かなかったら困るじゃないですか……と、朝夕その細い手足を揉み解す娘に、もう長も何も言わなかった。

この娘の一途な頑固さには敵わない。

「今日のこの子は……です。」



「初雪が降ったので嬉しそうでした。雪が好きなんですね」

「ああ…子供の頃からそうですよね…」

二人、水色のひっそりした睫毛を眺める。

少しの時間が流れる。この水色の妖精は言葉が要らないので、このパオも、あまり言葉で埋まる事はない。

帰りがけに御簾の前で、長はやっと少しの会話をする。

「単の訓練は進んでいますか？」

「はい、お教え頂いた通り」

「分からない事があったら聞いて下さいね」

「はい、有り難うございます」

里の中央に戻る長を、見えなくなるまで見送ってから、巫女はパオに入り、隅の止まり木に大人しく止まっている単（はやぶさ）を腕に乗せた。急な予知があった時の為、手紙を運ばせる訓練をしているのだ。

長様より預かった、胸に白い毛のある単に話し掛け、合図して大空に舞い上げる。今日はノスリ殿の所へ往復する訓練。上手く行って来て頂戴ね。

単は弧を描いて、灰色の低い空に消える。

……あのヒトも……また空を飛びたいだろうな……。

巫女は想う。

貴方は言いましたよね。妖精から見たら、人間の一生なんて本当に短い……って……。では、待っていて下さい。

私が、人間の一生を終えたら……その時こそ、貴方の目覚めの羽根になりますから。貴方が心置きなく背負えるよう、恥ずかしくない一日一日を、精一杯生きますから。

自分の人生の終わった後にも希望があるなんて、こんなに嬉しい事はありません……。

見上げる灰色の空から、また白い物が舞い降りる。ふわふわと所在なく漂う、初冬の儂い雪。

「風花かざはなっていつのよ……」

ふ・う・ん・

巫女は物知りなんだね……。

頭に響いた声は、風花と一緒に空に溶けて行った。

くおしまい

二〇〇九・一〇・某

